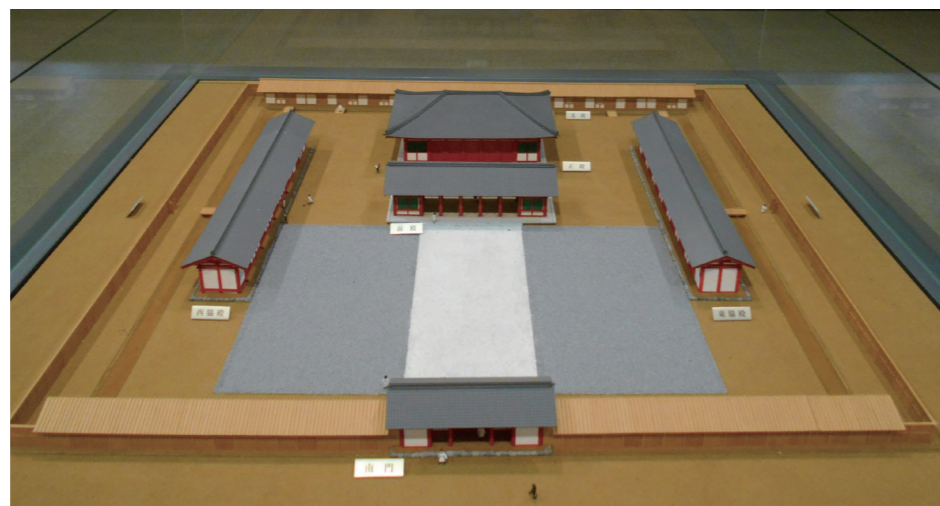


古代の栃木県、「下野国」が誕生

日本の古代国家は、7世紀中ごろから天皇を中心に有力な貴族と役人が全国を支配する国づくりを進め、朝廷(天皇が政治を行っていた場所)は全国を現在の都道府県にあたる約60の国に分けました。現在の栃木県は「下野国」と呼ばれ、国の行政機関「下野国府※」が置かれました。



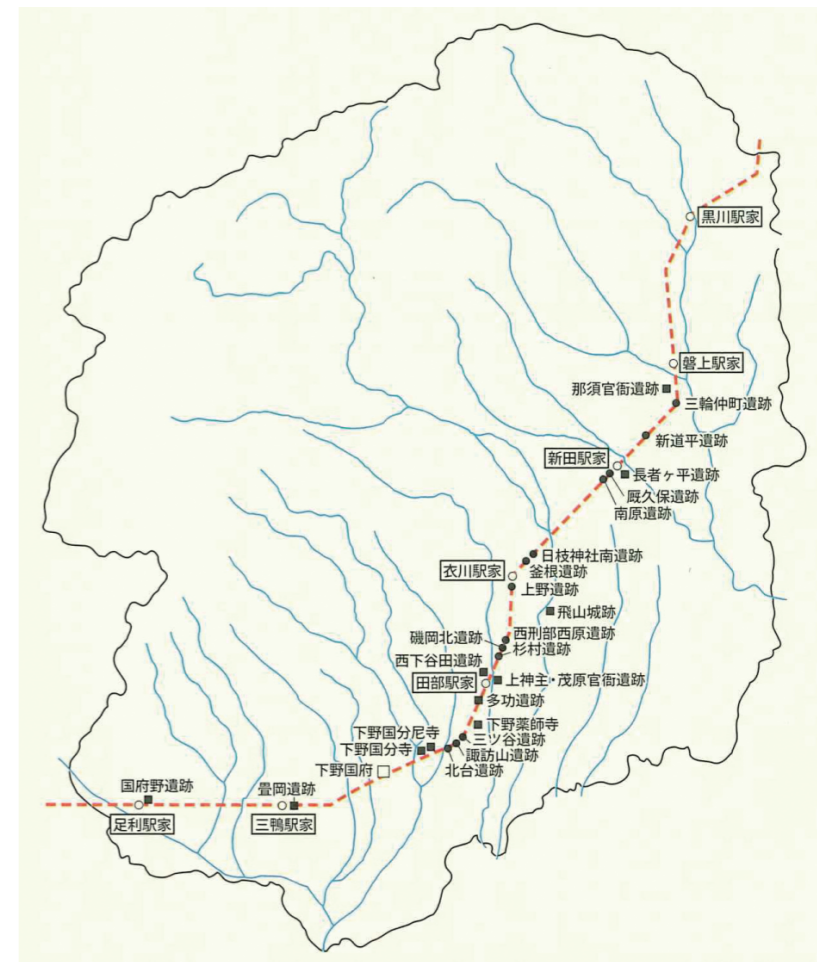
▲ 下野国府の復元模型 (下野国府跡資料館)

下野国府がどこにあったのか、長い間わかりませんでした。1976年から始まった発掘調査によって、田村町の宮目神社周辺に国府※があったことがわかりました。国府の位置が特定され、建物の配置までわかる例は全国的にも少なく、貴重な発見です。

※「国府」は国の役所の所在地を意味し、その中で最も重要な施設が集まる所を「国府」と呼ぶ。

中央と下野国府を結ぶ「東山道駅路」

この時代、朝廷は中央と地方の国府を結ぶ道路の整備も進めました。役人の移動や物資の輸送、地方の反乱をおさえるための軍隊などが移動するための道路です。道路には約16kmごとに「駅家」が設置され、とまる場所や食事などを提供してにぎわいました。駅を置いた路を駅路といい、都から信濃(現在の長野県)など都の東側の山道を通ることから「東山道駅路」といいます。下野国では足利郡(足利駅)、都賀郡(三鴨駅)から下野国府の南を通過し、東北地方につながっていました。



▲ 栃木県内の東山道駅路および関連遺跡 (『西方町史』より)



...column 教えて!とち介...



下野国府ってどんな建物だったの?

下野国府の中心となる建物は、正殿・前殿と左右の脇殿がコの字状に並んでいました。また南門から延びる幅9mの道「南大路」のあとも発見されています。また国府あとからは墨で文字が書かれた土器や仕事の内容が書かれた「木簡」など多くの遺物も出土しています。当時の下野国府と周辺では、なんと600人もの役人が働いていたと推測されています。

▼ 下野国府跡前殿 (復元)

